慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生産的及び不生産的なる語に就て（六、完）
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.12 (1924. 12) ,p.1816(134)- 1833(151)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241201-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

米國に於ける郵便の發達が、移民の頃より今日に至るまでの發達が國土が全く未開なりしだけ其進步順調にして道路、車輛等の進化と常に相伴ひて發達せしは、他の諸國に比して最も鮮明に其經路を說明し我國の如く長き鎖國の突然の開放と共に一時に新制度を容れたる國家の夫と異りて甚だ興味あるものなり。

（大正十三年十一月二十九日稿）

生產的及び不生產的なる語に就て（六、完）

榎本鑛治

二十七

既に本誌十月號にも注意したる通り、生產的及び不生產的消費なる術語を最初に使用せる英國經濟學者は、スプーンナー氏の指摘したる如く、ジョン・スチュアート・ミルに非ずして、彼の父ジェイムス・ミル或はアダム・スミス以後ジェイムス・ミル以前の何人かである。（十月號拙稿一一二頁參照）併し後人に依て最大の注意を拂はれたる點より觀れば、ジョン・スチュアート・ミルの見解を以て第一となす可きであらう。而して現代經濟學者の生產的消費說に對する批評も、亦ジョン・ミルの見解に差向けらるゝのが常である。

即ちミルの見解に從へば生產的及び不生產的なる區別は、勞働に於けると等しく消費にも適用することが出來る。社會全員は悉く勞働者とは云へないが、彼等は悉く消費者ではある。而して其の消費は、生產的なるか將又不生產的なるか其の一である。即ち其の直接たると間接たることを問はず、生產に何等の貢獻をもなさざるものは、不生產的消費者である。生產的消費とは、社會の生產力を維持し、又增加せしむる消費のみを云ふのである。而して其の生產力は、土地に在ると、其の生產原料に存すると、其の生產要具に在ると、將又其の人々に存するとは、之を問はないのである。……乍併吾々は、之に依て一社會の富に取て生產的勞働及び不生產的勞働の區別よりも一層重要なる區別の存する事を知るのである。即ち其の區別とは、生產的消費に物品を供給するための勞働、及び不生產的消費に物品を供給するための勞働、是れである。換言すれば一國の生產的資源を維持し、又之に附加するために雇傭せらるゝ勞働と、然らざる勞働との區別是れである。（本誌八月號拙稿十二參照）

乍併ミル自身の例證に一瞥を與へ、又聊かなりとも之を勘考するならば、單に夫れ丈けにて茲に所謂生產的及び不生產的消費なる區別を飽迄固執することが、實際上如何に不可能であり、從て又之に依て利得する所が如何に僅少であるかを說明するに充分である。ミルの學徒として知られたるヘンリー・フォーセットは、此の點に於ても亦ミルの所說を殆んど盲目的に遵奉するのである。即ち彼の「經濟學綱要」第一編第三章には、先にミルの表現したる見解の要約が擧げられて居る。（H. Fawcett, Manual of Political Economy, 9th edit., 1907, pp. 15-16）之に反してエフ・ウォーカーは、其の「經濟學」に於て甚だ有望なる方面より本題に接近して居る。（Francis Amas Walker, Political Economy, 1883, pt. V, ch. iii.）今彼の見解を窺ふに、早期の時代及び文明狀態に於て必ず奢侈品と呼ばれたであらう所の物件に對する支出の多くは、事實上勞働者の生產的能率を增加せしむる傾向あるが故に、生

產的及び不生產的消費の間に何等か截然たる區別を設くることは、不可能であると是認して居る。而も尙はウォーカーは、各種の消費が一國の生產力に別異の效果を與ふとの明白なる事實を說きたる後に、即ち純然たる經濟學的見地より消費を取扱へる著述の少なきことを遺憾に思つて居る。曰く「今日吾々の必要とする人物は、富の眞實なる動學を見出す可き消費經濟學を著述して、富の使用に依て活動せしめらるゝ諸力の生產に及ぼす效果を辿る可き新らしきアダム。スミス若くは更に別個のヒュームである。此の事がなされたる時に――勿論其の時を待つ必要もなからうが――兎に角吾々は、生產的及び不生產的消費なる術語に對して多少理解し得可き意義を與へることが出來るであらう」と。（8 352）要するに消費論は今日未だ經濟學上充分なる研究が遂げられて居らぬ故、スプーンナーはウォーカーの提言に贊して、消費を分ちて生產的及び不生產的となす說には同ぜざるものである。（Palgrave, Dictionary of Political Economy, 1918, vol. III, p. 600）

勿論今日迄に生產的及び不生產的なる語に就ては幾多の誤解が生じては居るが、是れは、著述家が彼等の思想を發展させて「物質的富を生產する」又は「享樂の永續的源泉を生產する」との成語をも包含せしめ、而して斯の如き概念を所謂生產的なる單語の中に包含せしむと云ふことを明白ならしむれば、思ふに避けられたる誤解であらう。事實上傳統のために此の生產的なる語は、即ち全然生產的なる語を適用せざる所の「貯藏せる富」と特殊の關係を有するのである。斯くの如く所謂「貯藏せる富」に生產的なる語を適用せざるは、思ふに通常の意義の指示する如く、效用を生ずる所の或る努力に適用するため、即ち事實上其の目的に到達し得ず、若くは單に失敗が部分的に過ぎなくとも其の目的に到達し得ざる程度を除外したる總ての努力を包括するがためである。

斯る見解の下にフラックス氏は、左の如き成語を擧げて居る。

（イ）生產的資本とは、生產手段を生產し、又享樂の源泉を維持せしむるに貢獻する資本にして、資本其物が享樂の一源泉に非ざるものを云ふ。

（ロ）生產的支出とは、暫時的享樂に貢獻せざれども、直接若くは間接に效用獲得の手段を增加取得するに貢獻するが如き支出を云ふ。

（ハ）生產的消費とは、生產的勞働者の勞働能力を維持するに必要なるが如き消費のみを包含するにあれども、勿論其の中には兒童若くは病臥中の成人に必要なる消費を包含せしむるものとす。何となれば是等の消費は、勞働能力の發展若くは回復に貢獻するを以てゞある。

（ニ）生產的勤勞中には、勤勞其物が一個の目的に非ざれども、遙かに將來に於ける效用に對する一個の手段たるが如き勤勞は、總て包含せらるゝのである。

（ホ）生產的效用――若し一個の對象若くは勤勞が直接的享樂に供與し得、而して同時に若くは交互に他の生產手段を生產し、又其の長短に關せず享樂の或る永續的源泉を生產し得るとすれば、即ち若し其の對象なり勤勞なりが直接若くは間接に享樂に供與し得るとすれば、夫れが間接に享樂に供與する能力中に有する效用こそ、生產的效用と呼ばる可きである。

加ふるにフラックス氏は、生產的及び不生產的なる語に關する、ジョン・スチュアート・ミルの見解を引用して、大體之に贊同して居るのである。

即ち彼は曰く「生產的と不生產的との區別に就てミルの與へたる人爲的本質は、若しも其の實際的成果が特定の場合に適用されて吟味せらるゝならば、明白となるに至るであらう」と。(Palgrave, Dictionary of Political Economy, 1918, vol. III, pp. 216-217.)

以上に於て私は、二三現代經濟學者の生產的消費說及び生產的勞働說に對する見解、並に之に關して生產的及び不生產的なる語の意義を紹介したのである。而して彼等の結論は、何れも之を支持する態度に出でゝ、如上の見解を表現するものではあるが、其の言說の中に之が否定の暗示を殘せる一事も看取することが出來る。然らば生產的及び不生產的なる語は、近き將來に於て經濟學上斷然排棄せらる可き運命を有するであらうか。之が斷案は、現代經濟學界に異常の影響を與へたる故アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall)の見解に求むるに如くはないと思ふ。

二十八

現代英國經濟學の鴻儒と仰がれたる最近物故せるアルフレッド・マーシャルは、其の大著「經濟學原理」第三篇第三章第二節以下に於て所謂生產的勞働說及び生產的消費說を取扱つて居る。今其の大意を摘記すれば、左の如くである。

即ちマーシャルの所說に依れば、其の目的に到達し得ず、從て何等の效用を生ぜざる所の勞働は不生產的にして、其の他の勞働は皆生產的である。併し「生產的」なる意義は、種々の變遷を經て、今日に於ては、直接的並に一時的享樂の爲にするものを含まず、蓄積せられたる富を生產するものを生產的と呼ぶに至り、殊に現在の慾望の爲めにするものを除外して、唯だ將來の慾望に供へらるゝものを生產することのみ生產的と云ふを慣例とするに至つた。事實に於て、其の奢侈的たると否とに論なく、總ての有益なる享樂は、公私の活動の正當なる目的であり、又奢侈品の享樂は、努力に對する誘因にして、諸般の進步を促進するものである。併し若し勤勉の能率及び精力が同一であるとすれば、一國の眞個なる利益を增進するには、一般に一時的奢侈品に對する慾望を押へて、將來の作業に於て勤勉を輔助し、又其の活力を豐富ならしむ可き、甚だ確實なる永久的資源を獲得するにある。此の一般的觀念は、經濟理論の總ての階級に於て定まらなかつたと云へるのである。而して樣々なる學者に依て樣々なる區別が與へられて、或る職業は生產的と稱せられ、他の職業は不生產的と呼ばれたのである。

例へば最近の多數經濟學者は、アダム・スミスの提言を固執して、家內從者を不生產的となす

の類である。勿論多くの家庭には、過剩の家內從者がある。今若し其の精力を轉用して他の使用に充當したとすれば、社會は多大なる利益を享くるに相違ない。而してウォスキーの蒸溜精製に依て生活する人々の多數に就ても、亦同樣の事が云はれると思ふ。然るにも拘はらず、一人の經濟學者すら、彼等を名付けて不生產的となさぬのである。其の他家內に於てパンを燒くは不生產的にして、パン商のパンを燒くは生產的であると云ふは、議論の一貫を欠くものである。

故に單に「生產的」なる語を用ふる時は、「生產手段及び享樂の永續的源泉を生產する」(productive of the means of production, and of durable sources of enjoyment)の意に解す可きである。併し元來此の語の意義は漠然たるものなるが故に精密の議論には漫りに使用するを戒しむ可きである。而して其の生產手段の中に包含せらるゝ

ものは勞働の必要品にして、一時的奢侈品は之より除外せらるゝのである。從て氷砂糖の製造人は、其の製菓のために勞働すると、將又田舍の家庭に於ける私的從者として勞働するとを問はず、何れも不生産的なる種類に屬するのである。併し煉瓦積工が劇場の建設に從事する場合には、生産的として分類せらるゝのである。勿論享樂の永續的源泉と一時的源泉との間に於ける區別は、漠然たるものであり、又薄弱なるものである。併し此の困難は、事物の本質に存するものにして、或る語の考案に依て完全に此の困難を切拔けることは、不可能である。現に吾々は、低き人に比して高き人の增加することを斷言し得るけれども、其の場合には五尺五寸以上の人は、總て高き人の中に數へるか、若くは五尺六寸以上の人のみを高き人と分類するか、之を決定しての後ではない。同樣に吾々は、何等嚴密なる標準に基づかずに、不生産的勞働を犧牲にして生産的勞働を增加せしむると云ひ得るものなるが故に、生産的及び不生産的勞働に於ける區分線は專斷的である。若しも斯の如き人爲的區別線が何等か特殊の目的に對して要求せらるゝ所ありとすれば、明かに夫れは其の場合のために設定されなければならぬ。併し事實斯の如き場合は、殆んど起らないのである。

去れば茲に謂ふ意義と異なつて、此の生産的なる語を使用する時は、必ず爾く明言しなければならぬ。例へば「必要品を生産する」の意に於て生産的なる語を用ふる場合の如き是れである。

次にマーシャルは、生産的消費に言及して居る。即ち生産的消費なる語を術語として用ふる時は、「新たなる富の生産に使用する」(the use of wealth in the production of further wealth)の意でなければならぬと。從て生産的勞働者の消費は、皆生産的消費と云ふ可らず、其の中勞働者の生産力を維持するに必要なる部分のみを生産的消費と云ふ可きである。此の語は、物質的富の蓄積を論ずるに方りて有用なる語ではあるけれども、甚だ誤解せられ易きを免れない。何となれば消費は、生産の目的であり、終局であるからである。而して健全なる消費は、皆何等かの利益を生産するものである。而も其の多くは、直接に物質的富を生産するものではない。

斯く生産的消費說を取扱へる後にマーシャルは、其の脚註に於て生産的なる語に再び言及して居る。即ち生産的なる語が使用せらるゝ區別は、總て甚だ薄弱であり、又或る不確實なる調子を包含するものである。思ふに今日生産的及び不生産的なる語を用ふるは、殆んど價値なきことであらう。併し是等の語は、何れも長い歷史を有して居る。從て是等の語は、之を端的に廢棄するよりも寧ろ徐々に其の使用を限定して最後に之を無用ならしむるに如くはないと思ふ。

去れば其の本質上眞實なる關係ある場合に嚴密確定せる區別線を設定せんとの企圖は、生産的なる術語に對して往々與へられし嚴密なる諸定義に於けるよりも甚だしき禍害を殘せるものではあるけれども、併し夫等の定義に於けるよりも奇怪なる成果に導くが如きことは、決してなかつたと思ふ。例へば或る定義に依れば、歌劇の唱手は不生産的であるけれども、其の劇場への入場券の印刷人は生産的であり、更に劇場の案内人は不生産的であるけれども、彼が番附を販賣すれば生産的であると云ふが如き結論となるのである。斯く論じてマーシャルは、次の如くシニオアの所說を引用して脚註を結んで居

る。「例へば料理人は、ロース肉を調製するとは云はれないが、之を調理するとは云はれる、又彼は菓子を調製するとも云はれる。……其の他洋服屋は羅紗を用ひて洋服を新調するとは云はれるけれども、染物屋は着色せざる羅紗を用ひて染色したる羅紗を製造するとは云はれない。而も染物屋に依て生產せらるゝ、變化は、思ふに洋服屋に依て生產せらるゝ變化よりも甚大であらうけれども、洋服屋の手を通過する場合の羅紗は其の名稱を變更するに對して、染物屋の手を通過する場合の羅紗は、一向に其の名稱を變更しないのである。即ち染物屋は新奇の名稱を生產せざるが故に、新奇の物件を生產せざることゝなるのである」と。(N. W. Senior, Political Economy, 1872, 6th edit., pp. 51-52.)」

右に依ても知らるゝ如くマーシャルは、今日生產的及び不生產的なる術語を斷然と拋棄するよりは、寧ろ之を徐々に廢止する方可なりと稱して、從來英國正統學派の學者が使用したる生產的勞働說及び生產的消費說を取扱へるも、彼自身提唱したるミルの學說の修正案を用ひないのである。而して從來の學者の用ひたる「年生產」(annual produce) の代りに「國民的所得」若くは「國民的分配元資」(national income or dividend) なる語を用ふるのである。而も此の國民的所得の中には、所謂生產的及び不生產的勞働の創造物を等しく包含せしむるのである (Alfred Marshall, Principles of Economics, 1916, 7th edition, bk. II, ch. III, pp. 65-67; & pp. 79-81.) 故にマーシャルは、此の點に於ても亦是非の中間に立ちて、彼の旗幟を精明ならしめざる所が見える。但しマーシャルも、生產的及び不生產的なる經濟學上の術語が近き將來に於て廢棄せらる可き運命を有する事實丈けは之を認めて居る。

然らば本題に關する獨乙經濟學者の見解は、如何。

二十九

幸ひにユーリウス・レアー博士は其の著「國民經濟學の根本概念」(Dr. Julius Lehr, Die Grundbegriffe der Nationalökonomie, 1893.) に於て可成りに詳細に本題を取扱つて居る。依て私は、彼の見解を左に紹介しやう。勿論私は、彼の見解を以て本題に對する獨逸經濟學者の見解を代表せしむるためではない。唯だ彼の叙述の簡潔なるを採るのみ。

レアー博士は曰く「生產的及び不生產的なる語の間に於ける區別は、經濟學上極めて主要なるものにして、又屢々特に實生活にも適用せらるゝものである」と。即ち公的目的に對する確實なる支出の諾否が問題となれる時に、斯る支出は「頗る生產的」(eminent produktiv) であると考へらるゝ場合の如き、是である。既述の如くフィジオクラット流の見解を以てすれば、土地の生產物のみが生產的と看做さるゝのである。然るにアダム・スミス以來、生產的なる概念は擴張されて、單に原始的生產に依る場合のみならず、又物質精製に依る場合の物財生產、工業、雇傭勞働等をも生產的と看做すに至つた。此の故に人的勤勞給付、學者なる職業等は、不生產的と考へられたのである。今や何人と雖も、多くの行爲、例へば場所の移轉の如き、物財生產の前提及び條件の如きは不生產的であると云ふことを承認せざるを得なかつた。此の故にラウ (Karl Heinrich Rau) とロッツ (Johann Friedrich Eusebius Lotz) とは、一八一一年「國民經濟學の根本概念修正」(Revision der Grundbegriffe, in Beziehung auf Teuerung und Wohlfeilheit, angemessene Preise und ihre Bedingungen, 1811.) に於て、商業及び

運輸をば半ば生産的（mittlebar produktiv）となしたのである。併し人力及び物質は增加し得るものではない、即ち總ての生産は單に地方的出來事、物質の形態及び組織に關する變化に存するに過ぎざるが故に、車夫、鑛夫、農夫、及び職工の行爲間に於ける本質的區別は全然殘存せざるものであると、吾々は考へる。

斯の如く承認する論理的結果は、唯だ此の「生産的」なる概念を無限に擴張するにあるのみである。即ち敎師の行爲も、發明家の行爲も、或る生産の精神的指導者の行爲も、看護婦の行爲も、營利の行爲も、世帶の行爲も、皆生産的若くは半ば生産的と看做さるゝのである。

抑も如何なる種類の行爲、及び如何なる階級の人々が生産的と看做さるゝかと云ふ舊時の論爭は一の無益なる議論である。而も世人は、夫等の概念と生産的なる術語とを結び付けて考へる。而して其議論の眼目とする所は、或る行爲が經濟の諸要求と一致するや否や、換言すれば夫等の要求を通じて到達したる成果は亦此のために齎らされたる犧牲と等價値なりや否や、是れである。例へば保護貿易、精神的敎化、看護、藝術上等の目的のために支出せらるゝ國費は、正當に準備せらるゝものであり、又若し之を轉用しても直接に何等の物財をも生産し得ないとすれば、經濟的にも全く適應せるものである。然るに若し物財を生産するための生産的支出を他に轉用するならば、夫れは甚だ不經濟的であり得る。乍併人間は、先づ樣々なる生計維持の手段、詳言すれば啻に自己の境遇を改善するための事物及び給付のみならず、又自然の本質的威力に依て即ち動物や人間に依て惹起され得可き困窮を豫防し、若くは之に對抗するための事物及び給付等を必要とするものである。然る後に吾々は、單に衣食住を欲するのみならず、又高き文化の精神的享樂を目指すに至るのである。去れば是等の目的に役立ち、吾々の經濟力を增進せしめ、吾々の生活を愉快ならしめ、文化を要求するための行爲は、何れも皆人間が有益若くは生産的と名付け得可きものであり、且又經濟的にも正當に準備されたるものであると、吾々は云へるのである。（Julius Lehr, Die Grundbegriffe der Nationalökonomie, 2te aufl., herausgegeben von Dr. Max von Heckel, 1901, kap. 2, § 14, ss. 86-87.）

之を要するにレアー博士も亦生産的及び不生産的なる術語の區別を無用視する一人であつた。然らばストックホルム大學敎授グスターフ。カッセル（Gustav Cassel）氏は、如何なる見解を支持するや。即ちカッセル氏は、氏の近著「社會經濟學の理論」（Theory of Social Economy）に於て下の如く叙述して居る。

廣義に於ける生産は、單に物質的財の創造に限るものではない。直接に必要を滿足せしめ、又經濟的と看做さる可き勤勞は、悉皆生産行爲と考へられなければならぬ。故に夫等の勤勞は、生産の過程に於ける全部と解せられなければならぬ。從て吾々が生産行爲と考ふ可きものは、單に農業上、工業上、其の他の勞働者の努力のみならず、又家内從者、敎師、醫師等の勞働である。總ての生産行爲は、夫等の勞働に依て、必要を滿足せしむる大なる經濟的過程の中に一の分前を有するのである。事實に於て此の過程は頗る統一せられ、其の各部分が餘りに相結合せられ居るが故に、直接に必要を滿足せしむる勤勞を除外することは、幾多の事實に依て擧證せられるとは思はれない程である。

此の生産效力の定義は、今日迄頗る論爭せら

れて居る。即ち舊派經濟學に依れば、唯だ物質的財を生產する場合に包含せらるゝ勞働のみが生產的と看做された。之に反して直接に人間の必要を滿足せしむるを目的とし、又物質的財の介在なくして消費者に有用なる所の勤勞は、悉皆不生產的と看做されたのである。併し此の分類は斷然排棄せらる可きである。何となれば生產的と看做せる行爲の中に經濟學上の一大意義を包含せしむることは、漠然たる樣々の觀念を與へ勝ちなるを以てゞある。事實上此の術語は、即ち物質的財の生產こそ經濟行爲の一般的目的なれとの觀念に依存するものにして、從て又物質的財の中に體化せられざる勤勞は、精々間接に生產的であると看做さるゝのである。換言すれば夫等の勤勞は、物質的財の生產を促進し得可き範圍に於てのみ生產的であるのである。併し此の觀念を以てしては、人間の必要の滿足は一個の獨立目的であると云ふことを充分に理解し得るものでなく、又公然と是認せられざれども、大なる經濟學的混同の理論及び或る原因の中に潛在せる所の、物質的財への人間の從屬を意味することゝなるのである。果して若くは如何にして或る勤勞が物質的財の生產を促進するかは、夫れが經濟的且生產的と看做さる可きかの問題に關する限り、主要なる事實ではない。否主要なる事實であつてはならぬ。唯一の根本的要點は、即ち其の勤勞が直接若くは間接に人間の必要に適應するに役立つ所にあるのである。斯る場合には其の勤勞は、經濟的且生產的と看做されなければならぬ。

是れこそ、一個の經濟若くは經濟科學の何れかに於て健全なる定義たり得る唯一の方策である。而して或る經濟に於ける此の定義が總ての訓練――例へば醫術、教授、藝術等の如き――をば經濟科學の範圍內に齎らすとの抗議には、何等の威力もないのである。勿論物質的財の生產に限定せらるゝ或る經濟科學と雖も、物質的財の近世的工業生產に於て必要とせらるゝ多數の技術的知識を包含することはなからう。然り、經濟科學は、純然たる經濟學的研究の目的に必要なる以上に此の必要滿足の技術的なる方面と一般に呼ばる可きものに立ち入ることなくして必要の滿足を便利ならしむるを目的とする所の全人間的行爲を考慮に入れ得るのである。人間の必要に充當するを目的とする總ての人爲的行爲は、其の經濟的方面を有し、又其の程度に於て經濟科學の領域內に入るのである。此の科學は、自らを人間的行爲の經濟的方面に限定する限り、其の自然的限界を超越するであらうと云ふ氣遣を全然必要とせざるものである。

物質的財に對する其の關係に從て經濟的勤勞を生產的及び不生產的なる語に就て

る。例へば作業室の清潔、塵芥の吸收、浴場の設置等の如き是れである。是等の必要なる作業をば生產的勤勞の中に數へることを避くるのは、思ふに難事であらう。否、其の工場の監督者及び嬰託醫の勞働すら、「生產的」と呼ばるる可きであらう。然らば吾々は、何處に生產的及び不生產的なる境界線を設く可きであらうか。又大規模の運輸業は、人間と貨物とを運送するものである。此の場合に人間の運送は不生產的と看做して、貨物の運送のみ生產的と看做す可きであるか。然らば吾々は機關手と一般船員との勞働を如何に分類す可きであるか。更に或る都市水道に雇傭せらるゝ勞働者は、生產的と看做されなければならぬ。何となれば彼等は、都市の住民に物質的財たる飲料水を供給するが故である。其の他瓦斯事業に於ける勞働者に就ても生產的なる語が適用される。然らば電氣事業に於ける勞働者に就ては、吾々は何と云ふ可きであるか。即ち彼等は、何等物質的財を供給せざるものにして、唯だ光熱に關する非物質的勤勞を提供するに留まる。此の故に彼等は、「不生產的」の中に分類せられなければならぬ。去れば其の物質的財に對する關係に從て、或は生產的勤勞の中に、或は不生產的勤勞の中に區別することは、如上の大難事を惹起すに至るものである。即ち此の事實は、右の區分が經濟學的見地より觀て何等勤勞の本質的差異に適應せずして、如何にも人爲的であり、又餘りに無用であると云ふことを明かに表示するのである。故に所謂不生產的勤勞をば經濟行爲及び經濟科學の領域より全然除外する迄に其の結果を追求し行く人は何れも明かに幾多の不合理に陷れる事實を知ることであらう。（Gustav Cassel, The Theory of Social Economy, trans. by Joseph McCabe, 1923, vol. I, bk. I, ch. I, § 3, pp. 21-24）

斯の如くカッセル教授も、亦經濟學上の術語として生產的及び不生產的なる語を用ふることの不可なる旨を述べて居る。其の他生產的及び不生產的なる語に就ては、レキシス（"Produktion" in Handwörterbuch der Staatswissenschaften, von W. Lexis, 3 aufl. Bd. VI, ss. 1218-1219）、ハルムズ教授（"Arbeit" in Handwörterbuch, von Bernard Harms, Bd. I, ss. 576-577）等の叙述を始め多々あれども、獨乙經濟學者も亦是等の語の使用を拒否するに傾いて居ると思ふ。

三十

扨て上來縷述し來れる所を通觀すれば、經濟學上の術語として生產的及び不生產的なる語は、勿論單獨に存在せざるものである。即ち生產的（若くは不生產的）勞働、消費、支出等の成語となつて使用せらるゝか、又は斯る意義を表現する場合に使用せらるゝものである。而して生產的なる語を用ふる場合には、マーシャルも云へる如く、「生產手段及び享樂の永續的源泉を生產する」の意に解するのが常である。併し既に幾多の學者の指摘したる如く、是等の語の意義は、漠然として居るが故に、精密なる議論には漫りに使用してはならぬのである。

前號に引用したる如くジェヴンスは、從來の生產的消費說には全然觀念の混同せる所があるとなして、之を排して居る。又生產的勞働說に就ては、多數の經濟學者の指摘する如く、何處に生產的及び不生產的なる區別を設定す可きか甚だ分明ならざる缺點がある。而して生產的及び不生產的なる語の意義の取り方に依て、生產的及び不生產的なる區別も色々になるのである。無論單獨に生產的及び不生產的と云つた丈けでは、殆んど意味をなさぬ。「何の生產的」若くは

「何の不生産」なるかを限定せざれば、此の區別は無用なるに留まらずして、却て有害である。何となれば唯だ無暗に不生産的なりと云ふ時、は動もすれば之を輕視する弊に陷るを免れないからである。茲に於て福田博士の如きは、斷然斯る術語の使用を排斥して居る。其の所説の一端に曰く「……不生産的と云つたとて、決して之を蔑にする譯ではないとは、能く經濟學者の辯明する所ですが、此の如き辯明が屢々必要とせらるゝのは、即ち其の樣な誤解の無理ならぬ事を證明する所以であります。生産的勞働と云へば聞えが宜しく、不生産的勞働と云へば聞えが惡いのは、寧ろ當然で、其を左樣に解釋してはならぬと云ふのは、反つて人に無理を强ひるものであります。……私は經濟學上の術語として、獨り勞働に限らず、一切生産的、不生産的の區別を驅除し去る可きものと信ずるのであります。よつて勞働に、生産的勞働、不生産的勞働を區別することを、無用にして且つ往々有害なる事と信じて斷然之を取らないのであります。結果に於て失敗に歸した爲めに、不生産的となつた勞働を特に指名する必要がある時は、失敗した勞働とさへ云へば、事は足ります。云々」と。（福田博士著「國民經濟講話」、坤前册勞働經濟講話第二十四章八五一頁乃至八五八頁參照）

何れにしても生産的及び不生産的なる語の使用せらるゝ區別は、總て甚だ薄弱であり、又不確實性を帶びるものである。故にマーシャルも、今日是等の語の使用は殆んど價値なきことであるとの斷案を下したのである。乍併今日斯る術語を斷然廢棄する時は、樣々の障害を來す原因とならう　何となれば是等の語は長き歷史を有し、且又今日使用せる多くの經濟書には是等の語が使用せられ居るを以てである。勿論私も過去及び現在の諸經濟學者の見解に贊して、是等の語が一日も早く經濟學上の術語たる資格を失はんことを望む一人ではあるけれども、併し今日之を端的に廢棄して種々の障害を來さんよりは、寧ろマーシャルの所説の如く、徐々に其の使用を限定して、最後に之を無用ならしむるに如くはないと思ふ。斯くして生産的勞働、生産的消費等の成語も、近き將來に於て單に經濟學説史上に於ける一學説、例へば生産的勞働説、生産的消費説としてのみ取扱はるゝに至るであらう。（完）

銀行業の公共性を論じ山崎博士の批評に答ふ

勝田貞次

一

余は「銀行研究」第一卷第三號に於て、光山祐次郎の匿名を以て「銀行の本質」を論じ、山崎博士の銀行に關する定義を一考したるに對し博士は早速經濟學論集第一卷第一號に於て「貨幣又は金融に關する卑見の批評に對して」と題する一文を揭げられ、そのうちの一部分に於て余の意見に對して懇切なる批評を惠まれた。之に對して余は深く博士に感謝しなければならぬ。同時にまた一應の應答をしなければならぬのであつたが折惡しく余は海外に研究中にて歸省後も多忙を極め、爲めに余の應答が今日迄延引した